南浜中

夢や希望に向かい、進んで学ぶ生徒の育成

～課題解決型学習とテーマ型家庭学習の実践を通して～

（３年計画の３年次）

校長名　　木　村　政　和

１　研究主題について

本校では校訓に「自主」「協同」を掲げ、主体的に、なおかつ個々の役割や個性を尊重しながら、お互いを高め合える集団づくりに取り組んできた。本校生徒は、小・中学校ともに小規模校で学年を超えて協力し合いながら生活しているため、自然と助け合いの精神が身についており、教室内や異学年との人間関係も良好である。授業での教え合いや課題解決に向けた取組など、学びの場面での協調性は高い。

しかし、ほとんどが小学校からの顔見知りの集団であることから、お互いの能力もよく知り得ており、それが切磋琢磨する気持ちに結びつきにくい要因と考えられる。

生徒は総じて素直であるが、その素直さゆえに、与えられた仕事に対して責任をもって取り組むことができる傍ら、自主的かつレベルアップした活動や、場に応じた表現については消極的である。そのため、もてる力を発揮しきれていない傾向があり、学習内容の定着も低い。

そこで今年度は３年計画の３年次と位置づけ、主体的な学びの実践として、課題解決型学習と家庭における自主学習ノートの取組の指導について研究を中心に進めることとする。

また、継続して「キャリア教育の指導の工夫」や「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」の研究を進めることで、よりよい学習環境を実現できると考える。そして、生徒が夢や希望に向かって明確な目標をもち、主体的に行動するための手立てをより具体的に提示することで、生徒一人一人の意欲を高めることがねらいである。

２　研究のねらい

(1) 生徒のもつ疑問や「ズレ」を拾い上げ、ともに学習課題を設定し、課題解決に向かうことが生徒の学習に対する切実感・必要感を強めると考える。また、生徒の疑問を共有することでつまづきの共有化を図ることをねらいとする。

さらには、授業づくりにおいては、教師や生徒による UD チェックの評価も参考にしながら、「様々な指導の工夫や手立て」「個に応じた適切な支援」に重点をおき、進んで学ぶ生徒の育成や基礎学力の向上を目指す。

(2) 教育目標である「夢を拓く」の実現のために、学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力を育てることをねらいとし、自主学習ノートの取組の指導を通して授業での評価観点である「主体的に学習に取り組む態度」と家庭学習との連携に力を入れる。授業で学んだ内容や学び方を利用し、自らの学習を調整したり、粘り強く取り組んだりする力を身に付けさせる。

３　研究仮説

(1) 課題解決型学習により、自ら疑問を抱き、もちえた仮説が理にかなうかどうか自分で考える過程の中に学習の目的があることに気づくことができる。また、ユニバーサルデザインとキャリア教育の視点も継続して取り入れることで､基礎的・汎用的な能力を高めることにつながり、主体的に学習に取り組むことができる。

(2) 家庭学習は「学び」という枠の中で学校教育と深く結びついている。自主学習ノートの取組の中で､授業で学習したことの定着を実感したり､新たな知識や技能を獲得したりすることで、「学び」そのものの楽しさや意義を感じさせ、目的意識をもって学習に向かうことができる。

４　研究内容

(1) 課題解決型学習の工夫

生徒が自ら問題を発見し、主体的に問題解決に向かえるよう、授業の導入から課題設定までにおいて教師のはたらきかけを工夫する。そこで生徒に「ズレ」の問いをもたせることにより、主体的・対話的な学びの実現につなげていく。課題についてはユニバーサルデザインの視点を生かして効果的に提示する。また、キャリア教育の４観点については、課題解決に向けて「チャレンジする力」を基盤とし、「思いを伝える力」「自分や相手の良さに気づく力」「目標に向かって計画する力」の中から、学年の発達段階に応じて必要な観点を重点的に捉えて授業を構成することとした。

(2) 自主学習ノートの指導の工夫

帰りの学活で１日の授業内容を振り返り、自分で目標や課題を見つける時間を保証する。また、教師はその学習課題を解決するのに適した内容や方法について、必要に応じて生徒と検討したり、助言したりする。生徒は「学び」そのものの楽しさや意義を感じながら、「やらされる」学習から、「やりたい」と思える学習へと変化し、夢や目標に向かって主体的に学習に向かうことができる。

学期ごとに、各生徒の「ベスト自主学習ノート」をコピーして、ポートフォリオすることで個人の成長を見届けて指導をする。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修予定（学年・授業者・講師等）	全体会等
４	５	教科研究主題　共通理解	全体会（共通理解）
５	１９	教育指導課・センター訪問	授業参観⇒授業巡回
６	１	JS 全体会（中学校授業公開）　※中止	授業参観・研究協議
９月２～３週		相互授業見学 国語⇔理科　理科⇔英語　数学⇔理科 保体⇔数学・理科	授業参観・感想交換
１１	８	JS 授業参観(種差小学校)	授業参観・研究協議
１１月 ２～３週		全クラス　道徳(校長) 「SDGs について」	授業参観・感想交換
１	１９	ローテーション道徳（１年）	授業参観・感想掲示
２	１６	今年度研究報告（研修係）	全体会（成果と課題）

(2) 一般研修

月	日	研修予定内容　(担当等)
７	６	一般研修 １人１台端末活用 （八戸市総合教育センター　大下 洋一 主任指導主事）
７	９	キャリア教育講話「介護・福祉について学ぶ」 （八戸市役所市民労災課　田村 晶孝さん、 修光園介護福祉士　李澤 修大さん）
７	１５	ネットモラル講話（まなビレッジ代表　森 淑乃さん）
１０	４	薬物乱用防止教室　(青森警察署　長利 真至さん)
１０	６	いのちを育む教育アドバイザー事業　性教育講演会　※中止
１１	２４	一般研修「学びに向かう力(主体的に学習に取り組む態度)について」 （八戸市教育委員会　日向端 聖 副参事兼主任指導主事）
１２	２０	食に関する指導「おやつの食べ方について」 （東給食センター　栄養教諭　中村 孝江先生）

６　研究の成果

(1) 教師は積極的に生徒の意見をすくい上げ、全体の課題として共有した上で、可能な限りではあるが実験検証していくように努めている。自分たちの気づきやズレに皆で立ち止まり、問題解決に向かう学びの中で、生徒から「そういうことか」という言葉が発せられる瞬間がある。これまで学んだ個々の知識が生徒の中でつながり、まさに腑に落ちた瞬間であり、それが生徒一人一人の問題解決意欲を喚起・向上させることにつながっている実感がある。

(2) 生徒の学校評価アンケートでは、「テーマ型家庭学習は、学力向上に役立っていますか(授業の振り返りや学びに向かう力も含めて)」について、「そう思う」のA評価が28%、「どちらかといえばそう思う」のB評価が52%である。A＋Bで78%が肯定的な回答であり、全体的に評価が高い。不定期ではあるが教科担任も自主勉強ノートを点検し、効果的な学習方法を具体的にアドバイスするなどして連携を図りながら進めることで、生徒が学習の調整を図りながら、ねばり強く取り組む力の向上につながっている。

７　研究の課題

(1) 課題解決型学習の実践では、多くの長所がある一方で課題もある。能力差が大きく、生徒数も少ない中で、学習課題を導き出すにあたり、問題発見能力の高い生徒の発言が全体の課題として取り上げられることが多い。消極的な生徒は傍観者となってしまうことも往々にしてある。また、学習内容に興味関心をもたせることはできているが、目的意識をもって主体的に学習しようとする態度までは至っていない実態がある。教師は生徒から適切な課題を引き出すために、生徒に思考を促し、学びに向かうための働きかけをすることが常に課題としてあり、憂慮している現状がうかがえる。今後も、継続して研究を進めなければならない。

(2) 上記の６の(2)の生徒アンケート結果では、C評価が17%、D評価が5%見られ、依然として学級担任や教科担任のアドバイスをうまく生かせていない生徒もいる。学習内容や方法が、授業の振り返りとまとめに役立っているのか、資質・能力の育成につながっているのか、生徒にとって効果的なのか、学習改善や学習意欲につながっているのか、などについて、教科担任がさらに深く介入し、検討しなければならない。そして、学習の調整を図りながら本当に個々の能力に応じた「学び」の楽しさや意義を導き出せるよう、継続した指導が必要である。

（記入者　小峠佐和子）